

# 時代がようやく追いついた

かつては「変人」と言われ、ワースト・ドレス・マンに選ばれたチャールズ皇太子が、なぜ今ベスト・ドレス・マンに選ばれ世界中から彼のスタイルが注目されているのか……!? 服飾史家の中野香織さんが楽しくわかりやすく解説する。

文：中野香織

エッセイスト／服飾史家

東大卒業後、ケンブリッジ大学客員研究員などを経て文筆業を開始。ファッション史から最新モードまで、幅広い視野から研究・執筆・レクチャーをおこなっている。「モードとエロスと資本」(集英社新書)、『ダンディズムの系譜 男が憧れた男たち』(新潮選書) など著書多数。2008年より、明治大学特任教授。http://www.mode.kaori-nakano.com



GQ EXCLUSIVE

チャールズ・ファッションを  
解剖する。②

## ワーストからベストへ、 世間の見る目が変わった。

男の服には、女の服よりも社会的な制約が大きいのです。標準ないし約束事がある、そこからどのように距離をとっているのかが、その人の「スタイル」の表現となります。まったく無難ではつまらない男として看過される怖れがありますし、あまりにも世間の基準からかけ離れているのも好奇の目で見られる原因となります。標準との距離の取り方が、その人の生き方や考え方そのものの反映として好ましく見えるとき、その人は、ウェル・ドレスト・マンとして、同じ男たちから一目置かれることになるわけですね。

というわけで、今年、英「GQ」誌からベスト・ドレスト・マンに選ばれたチャールズ皇太子について考えてみましょう。

皇太子ご本人のスピーチにもあるように、この方は近年、ワースト・ドレスト・マンにも選ばれることがありました。さらにさかのぼると、70年代にはサファリスーツを着たり、ヒゲに挑戦したり、胸毛におおわれた水着姿を披露したりと、やや冒険的なこともなさっていますし、80年代には別荘ハイグローヴで有機農業に取り組むカントリースタイルが「変人」のしるしのようにみなされたこともあります。正確に言えば、世間がバブルに沸いている最中に有機農業に取り組むという行動をとること自体に対して、変人の評価が与えられていたのですが、行動が好意的に受け取れないとき、どんな素敵な服を着ようと、その人はウェル・ドレスト・マンのリストには入ってこないのです。

だから、チャールズ皇太子がベスト・ドレスト・マンに選ばれたということは、服装の背後にある皇太子の行動や考え方が、今の英国社会から支持されているということにほかなりません。少なくとも、80年代からほぼ同じ服を着続けているチャールズ皇太子がワーストになったりベストになったりしているということは、殿下を見る世間の目が変わったにすぎないことを意味します。

では、ベスト・ドレスト・マンに選ばれた現在、殿下のどのような考え方や行動が好意的に受け止められているのでしょうか。まずは、なんといっても、エコ・ヴィジヨナリー(環境系啓蒙活動家)としての一貫性。ただ信念を説くばかりではなく、行動し、具体的な成果を花開かせて、先見の明ある「ビジネスマン」としての才覚まで見せた点が高く評価されているのだと思います。80年代、世の風潮にかなり先駆けて、チャールズ皇太子は有機農業を始めました。そこで栽培された農産物を生かし、90年代には有機食品ブランド「ダッチー・オリジナルズ」を創設し、大成功させます。その事業で生まれた純利益は、すべて皇太子の慈善団体に回り、その慈善団体は、2007年、トラディショナル・アーツ社を設立しました。この会社は、最高品質の工芸製品を製作・販売する会社で、製品の製作者は、「皇太子の伝統芸術学校」で学んだ卒業生。現代の多くのビジネスシーンで謳われる「エコ・エシカル・サステナブル」という価値に早くから注目し、それを一貫して追求した結果、「リスポンシブル・トラディショナル・エデュケーショナル」というさらに世の一步先を行くイマドキ社会貢献までやってのけた。自らの地位を最大限に生かした「よき循環」を実現させた功績を称えないわけにはいきません。皇太子の先見の明と一貫性の凄みに、時代がようやく追いついた感があります。

## 英国の伝統の底力も 加えた本格的英国スタイル。

好意的に受け止められている点その2は、古いものや伝統を大切にしている態度。殿下の場合、それを次世代へ引き渡すべく強気に行動していることが、単なる好古家と一線を画しています。2010年から皇太子が先導している「キャンペン・フォー・ウール」をはじめ、スコットランドのエステート・ツイード生産のための工場復活なども、そのごく一部の例です。ウール産業周辺ばかりではありません。歴史的な建築の保存に関しても、「英国の未来像 建築に関する考察」という本を著すなど、啓蒙活動は多岐に及びます。個人レベルでも、従者の年齢よりも古い年齢のスーツを着続けたり、同じ靴を修理して何十年も履き続けたりしていることを明かしています。そうした公私において矛盾のない、筋金入りのサステナブルっぷりは、ファストファッションを大量消費することに倦んだ現代人の目に、実に新鮮に映ります。ダイアナ妃との結婚前からおつきあいのあったカミラ夫人と紆余曲折の末に再婚したことも、ある意味、古くからあるもの(失礼)を大事にする生き方を貫いた証ともいえましょう。

好意的に受け止められている点その3は、ユーモアとサービス精神。一貫性や古いもの尊重という態度はガンコと紙一重になる怖れをはらむのですが、皇太子の言動には、そこはかとなくユーモアが漂い、人をはっとさせるサービス精神が感じられます。皇太子の在任期間が、ヴィクトリア女王の長男エドワード7世の記録を抜いて1位になった昨年あたりから、そのアピールが顕著になったように見えます。今年に入ってから、BBC放送のお天気キャスターとして登場したり、カナダでDJの真似事をしたり、スーツ姿でロッククライミングに挑戦したり。英国民からの人気も急上昇し、6月に「サンデー・タイムズ」がおこなった世論調査では、チャールズ皇太子はウィリアム王子を抜き、女王の後継者としてもっともふさわしいという結果が出たと報じられました。

以上のような皇太子の行動や考え方を補強するのが、ほかならぬ殿下のスタイルの数々なのです。ダブルブレストのスーツ姿は、すっかり皇太子の定番として知られていますが、これが時代に媚びずわが道を行く皇太子の一貫性の象徴として別格感を放っています。昔ながらのアンダーソン&シェパードのコートとジョン・ロブの靴は、時代が求めるサステナブル精神の模範的な表現として、憧れの対象となっています。ジョンストン・オブ・エルジンのツイード製上着や、ジェームズ・ロック帽子店のツイードキャップといったカントリースタイルは、自国産業を積極的に奨励し続ける殿下の責任感の高貴な表れと見えます。華やかなブトニエルとポケットチーフの組み合わせや、大胆なカフリンクスは、ユーモアとサービス精神のみずみずしい表現として好ましく映ります。

常に一貫して変わらぬチャールズ皇太子のスタイルに、いま、時代がようやく追いつき、皇太子は還暦を過ぎて、これまでのキャリアのなかで最も大きく美しい花を咲かせています。時代と人とスタイルがぴったりと一致した、真の意味でのベスト・ドレスト・マンとしてばかりではなく、そこに英国の伝統の底力も加えた本格的英国スタイルの最高体現者として、チャールズ皇太子のスタイルの記憶は、私たちの心とファッションの歴史に永く刻まれていくでしょう。